

☆ 回りに向かう～供養のあれこれ～



追善法要、回忌法要、追善回向など、これらはつまり法事のことです。とりわけ回向（えこう）という言葉は、普段日常生活で耳にすることは無いと思われまふ。善なる行いが回りまわって向かっていく、という意味ですが、法事に限らず、存命の方の為に人知れず善行を為すことなども立派な回向と言えます。

日本の仏教では身近な方が亡くなると、通夜葬儀が営まれ、遺体は茶毘に付されても尚、故人を偲んで回向を行います。この回向は、主な趣旨としては故人の為に、近親者が集い営まれるものですが、それだけでは無いのです。亡き故人をさながら鏡の如くして、そこへ向かう想いがまた反転して生ける近親者のもとへと回り向かうこと。それも回向の大事な側面なのです。できるることならば、その反転の光ともいえるものを、ごく自然で素朴な感謝の想いへと変えていくことが素晴らしいことではないでしょうか。

それでは、回向の第一歩としての善行とはなんなのでしょう？ それは第一に清め、第二に供物、第三に法事、というふうになります。

まず、清めとは掃除のことです。ご家庭のお仏壇、祭壇、お墓などの、御霊を迎え祀る場所を清めるという当たり前のことですが、自分の経験上から申しましても、水拭きされ物の配置が整った道場には善い空気が引き締まっているものです。無理がいかず、できる範囲で心がけたいものです。

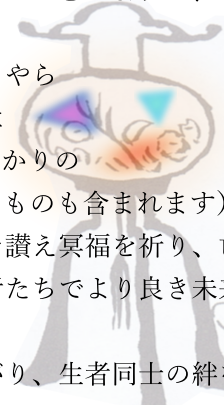
次に供物ですが、これには菓子、果物、生花、本膳などが含まれます。種類はなんでも構いません。故人様の好きだったものや季節の旬のものをお供えするのがもっとも好ましいと思います。ただし、本膳だけは精進料理で仕上げたき、もし魚やお肉をお供えする場合は、別のお皿に盛り付けるのが良いでしょう。故人様がまだ四十九日を迎えていない場合、それらの肉魚はなるべく四十九日法要が終わってからの方が伝統的ではあります。

肉魚のお供えと聞くと不殺生はどうなるのか？、と疑問があるかと思いますが、これについてはまた改めてお話しします。

最後に肝心の法事です。現代でこそ掃除やら供物やらお飾りやら読経までも全部含めて法事と呼んでいますが、本来の法事とは字の如く、法の事、つまり仏法に触れる事を意味します。故人ゆかりの親族、友人が集まったうえで、様々な仏の教え（古の高僧によるものも含まれます）を僧侶が代表で唱え、会衆全員がその教えを心に念じて、故人の遺徳を讃え冥福を祈り、亡き故人に会えない悲しみを癒し、命の尊さを再度胸に刻み、残された者たちでより良き未来に向かって歩みだす、それを確かめ合うひとつの機会なのです。

ひと通りの儀礼が終わればあとは無礼講、思い出話で盛り上がり、生者同士の絆を深め合う、良いお酒の場となっても一向に構わないのです。

と、お解りのように法事にしても葬儀にしても、あくまでも主役はそれを営む人であり、僧侶ではないのです。と言いつつも、法事の間では故人様の生前の想いを胸に浮かべ、少しでもお釈迦様の教えを啓発していくことが、私の役目であり、私が精進すべきことだと重く受け止めております。



飾り付け例

できましたら、遺影が祭壇の中央にあり、かつその下にお位牌、本膳、お供え、さらに経机、香炉それらすべてが一直線に並ぶのが理想です。お位牌でお顔が隠れる場合、位牌を向かって右にずらします。お供えの果物は、できる限り天地が逆にならないようにします。

